

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
7	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)	
Alcohol consumption, abstaining, health utility, and quality of life--a general population survey in Finland. アルコール消費量、禁酒、健康効用と生命の質 フィンランドにおける一般住民調査	
執筆者	
Saarni SI, Joutsenniemi K, Koskinen S, Suvisaari J, Pirkola S, Sintonen H, Poikolainen K, Lonnqvist J.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Alcohol Alcohol. 2008 May-Jun;43(3):376-86.	
キーワード	
アルコール消費量、禁酒、健康効用と生命の質	
要 旨	
<p>目的： 効用理論に立脚した健康関連 QOL (HRQoL)、主観的な QOL(QoL)、自己報告による健康(SRH)、精神的苦痛とアルコールの消費量が関連するか検討した。</p> <p>方法： フィンランドを代表する 30-64 歳の一般住民 5871 人を対象とした調査。HRQoL は 2 つの health utility instrument(15D と EQ-5D) で測定され、QoL と SRH は RATING スケールで、精神的苦痛は GHQ-12 で測定された。過去のアルコールに関する問題は composite international diagnostic interview (CIDI) として知られている構造化された精神医学的面接によって診断された。アルコールの消費量は自記式調査票で検討された。</p> <p>結果： 1 週間あたりの消費量が女性で 173g 以上、男性で 229g 以上の場合、アルコール消費量と well-being との関連をみると、いくつかの指標でネガティブであった。過去飲酒者はほとんどの測定でスコアが最低であり、飲酒者の十分位の最上位と比較しても悪かった。男性では適度飲酒と well-being との関連については、社会人口学的要因と過去飲酒を調整すると、すべての統計的に有意な関連は消失した。女性では適度な飲酒は、禁酒者と比較すると、SRH と EQ-5D がよいことがわかった。しかしながら、適度なアルコール消費と関連する健康効用のベネフィットは臨床的にわずかな大きさであった。</p> <p>結論： 過去飲酒者と禁酒者を分離しない場合、適度な飲酒者に有利なバイアスが生じる。適度な飲酒者における健康効用の恩恵の可能性は臨床的には有意でないため、生命の質で調整した生存年数を用い、適度なアルコール消費の公衆衛生的なインパクトを推定する場合には、死亡率を検討することで十分である。</p>	